

---

NEW@CYBER・WORLD.ne.jp

チャカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

NEW@CYBER・WORLD・ne・jp

### 【Nコード】

N2809L

### 【作者名】

チャカ

### 【あらすじ】

全てはたった一日の物語。

:? p r o l o g u e s t o r y :

2022年3月15日

恐らく日本、多分東京、

今は午後8時32分。

「なんだコレ？」

ヒマを持て余しネットワークの海を彷徨っていたその女、高比良グ  
リ子はほとんどアクセスもないような過疎エリアでなにやら奇っ怪  
な生物データを発見した。

表面は突起に覆われ体色は黒くフヨフヨと無害な風に漂うそれは一  
見してウィルスに見えるもののグリ子が近づいても何の行動も起こ  
さない所をみるとどうやらそうではないらしい。

かと言って何かしらのデータの残骸でもないらしく流れてくるデー  
タのカスを上手に捕まえるとグリ子の存在や視線など意にも返さず  
それを小さな口でムシャムシャ食べていたのだ。

「かわいい……」

およそ二十歳の女がそれを見てそうは思わないだろうと思われる感想を呟いたグリ子はキャプチャーネットを取り出すとその謎のデータを捕獲し家へと持って帰った。

時を少し遡り午後8時08分。

都内某所、

とある高層ビルの一室、

「例のモノが逃げ出した……」

自室でその緊急連絡を受けた男は全ての報告を聞き終わる前に部屋を飛び出していた。

「まさかまさかまさか……」

繰り返し呟く疑いの言葉。

突然響いたドアを開ける音よりもむしろ何時も冷静沈着な男から放たれる明らかな動揺と切迫感から部下達の視線が自分へと集まるのが分かったがそんなもの気にもせず室内を抜けて廊下に出た男は焦る気持ちを表すように落ち着きのない足取りで研究室に向かうとそこに表示された映像を見て愕然とした。

「そんなバカなッ……!!」

薄暗い室内。

山積みになれた書類。

壁中を巨大な演算機に囲まれた中に置かれた巨大なモニター画面はアラートランプで赤々と点滅しそれを見た男はどんな時も常に埃っぽい空気をかまわず吸い込むと目一杯そう叫んだのだ。

「何故だッ、有り得ない……！！」

続いて絞りでる否定の言葉と裏腹に画面に映し出されたのは在るはずのモノがない光景。

「一体何があつた!？」

男は顔を真っ赤に染めながら横のスタッフに怒鳴りつけるような激しい剣幕で事の顛末を説明させた。多少の間を置き予期せぬ事態に見回れまさかのミスを犯してしまったスタッフは重い口を静かに開くとゆっくりと震える声を紡ぎ出した。

「我々のサーバーを一部間借りしていたサイトで国内ユーザーと外国ユーザーの間でいざこざがあつたらしくサーバー自体が比較的大きなサイバー攻撃を受けたため此方にも影響が出たようでセキュリティが不安定になつている僅かな間にネットへと流出してしまったようです……」

流出、

一番聴きたくなかつた言葉だった。どうせならば消滅してくれれば良かったのに。

アレがもし誰かの手に渡つたら……。考えたくもない妄想はどんど

ん膨らむばかりで止まることなく気づけば妄想にばかり囚われて  
次の一手を打つことを忘れていた。

「とにかく、一刻も早くアレを探し出し回収しろ」

「はい」

「あの力は私の物だ。絶対に決して何があろうと他の誰にも譲りは  
しない……!!」

回り始めた大きな歯車。

: p r o l o g u e   s t o r y : ?

:?1st count:

乱暴に開かれた扉。

入ってきたのは教師ではないスーツ姿の一人の男。

「よおガキ、元気だったか？」

入ってそうそう鋭い眼光でオレを串刺しにした長身の男はデカイ体をどっかりソファに沈めると取り出したタバコに火をつけた。

この男の名前は依藤 真九郎。

警察庁電腦犯罪対策部電腦公安二課所属の刑事だ。

詰まるところ一年半前にオレを捕まえた男でもある。

「なんで依藤のオッサンが……」

不満を隠さず吐き出したオレを依藤は躊躇なく叩いた。

「ああ？オレはまだ28だ。オッサンじゃねえ……。根性焼きは、されたことねえだろう……？」

容易に眼前まで近づいたタバコの火が僅かな残光を残して帰っていたのを確認したオレは不満だらだらなため息で漂う煙を吹き飛ばした。

オレがこんな態度をとるのにはわけがある。

誰でもこの世に一人くらいキライな奴がいると思う。

殺したいくらいキライなやつから見ただけで吐き気がするほどキライなやつまで千差万別な様々なキライの形があると思うがオレにとつての依藤 真九郎は見ただけでぶっ飛ばしたくなるほどキライな分類の人間だった。

一般の方からすれば生温い仕打ちを求めているように見えるかもしれないがオレにしてみればこの依藤真九郎がどう足掻いても過去最高キライランキングの栄えある一位を飾る最も唾棄すべき人物であることに間違いはなかった。

依藤が来ると知っていればこんなところか。

今思えば校庭に止まっていた見慣れない車はコイツのものだったのかもしれない。

正直開く扉の隙間から顔を伺ってそれが誰かわかった瞬間から逃げ出したい気持ちを抑えていた。

早く帰れ。

バカ。アホ。独活の太木。

目の前に座る依藤に言ったらさっきの比ではない打撃が飛んできそうなので暴言を吐き出すまいと内にとどめて堪えるオレなどお構いなしにやってきたなんてことない世間話がオレの耳に触る。

「で、テメエはまともに学生やってるか？」

「やってますよ……。至極真面目にね。なんなら教師に頼んでオレの成績表でもみたらどうです？ 依藤さんにとってオレの成績表見るくらいいけないでしょ」

なんの質問？

と思いつつキライな相手の質問にキチンと答える自分のお人好し加減がオレは少しキライで少し好きだったりする。

「成績だけ見て全部わかるんだったらこっちは苦労しねえよ。過去にどれだけの成績優秀者が犯罪に手を染めたと思ってるんだよ？ 頭がいくら良くなつて根ざした先が真つ黒だったら幹まで真つ黒だ。成績なんて関係ねえ。むしろ頭良い分厄介だ」

「そうですか。それは随分難儀ですね」

「わかるか、この大変さが？」

「ええわかりますよ。で、今日はオレを呼んで何のようですか？ わざわざ校長室まで借り切って世間話じゃ割に合わないでしょ？」

「ああ、実は昔とつ捕まえたハツカー野郎の幹が何色になったか見に来たんだよ。わざわざ」

「それはつまりオレの幹が何色か見にきたってところですか？」

「御名答」

依藤の懷から机に乱雑にばらまかれた写真にはどれも似たような格好をした黒いアバターがうつっていた。

ダイバーダウンを使いネットワークにアクセスする事を俗にダイブするというのがアバターとはその際に人間の精神の器となるものの事をさす。

自由自在にカスタムする事が可能でどんな姿にでもなれるアバターの存在自体がダイバーダウン人気の一端を担っていたりもするのだがこんな邪悪モロだしなアバターもなかなか珍しいものだ。

「なんですかこれ？」

「それを聞きにオレはここまで来たんだよ」

いや、知らないですよ……。

と発言する隙すら与えないこの男の強引さがオレは嫌いだ。

「コイツは、いや、コイツ等だな。大した違いはないが似たようなヤツが複数体確認されているわけだがまあコイツ等がここ最近ネッ

トワークを荒らし回り、様々な機関機能に障害をもたらしている。簡潔かつ端的に言つとだな、オレはテメエがコイツ等の黒幕だと踏んでいる」

「ちよつ、オレはそんな事やってませんよ！なんの証拠があつてそんな事いつてんすか！？」

「証拠？んなもんねえよ。

正直どんだけ洗つてもこのアバターとテメエの関係性なんか微塵もででこなかつた。

だがよ、俺達が出来る限り集めた行動記録によるとだな、ピタリと符合すんだよ。

テメエがハッカーやつてた時にハッキングやらクラッキングした場所とこのアバター達が暴れた場所が。昔の道筋辿るなんざどんな目的があるか知らねえが、そんなもん知ってるのは当の本人のテメエが捕まえたオレくらいのものだ。だからテメエが犯人なんだろ？」

「違います」

「嘘はキライだせえゝお兄さんは」

「やってません」

「仏の顔も三度までだぞ？ああ？」

「違うつて言ってるじゃないですか。オレはやってない！だいちオレのパソコンはアンタ達の監視下にあるんだ、アバターアカウントも持たずダイバーダウンの使用も制限されてるオレが犯人じゃないのは分かり切ってることだろ！？オレは何の関わりもない！」

思わず身を乗り出して叫んでしまったオレを依藤は品定めでもするような目で見ていた。

慣れないことをしたせいか我に返ってみると急に恥ずかしさがこみ上げてきたが、そこはぐつと堪えて極道さながらの眼光と対峙していた。

しばらく時が流れる。

「確かに……、その通りだ。」

ボソツと呟いたあと一気にタバコの残りを灰へと変えるとおもむろに立ち上がった依藤はそれでも鋭い眼光を瞬かせながら扉へと向かった。

「テメエは関係ないと言ったがオレはこの事件の中心にテメエを感じている。いいか？今日は警告だ。関係ないならそのまま黙ってる。だがそうじゃなかった場合は次は少年法なんて甘っちょろい事言わずに確実に独房に繋いでやるから覚悟しとけ」

今度は静かにしまった扉。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2809/>

---

NEW@CYBER・WORLD.ne.jp

2010年10月11日17時31分発行